

令和 6 年 4 月 24 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04424

研究課題名（和文）高齢者のライフレビューが生起するとき 奏功機序の解明と技法論の構築に向けて

研究課題名（英文）When Life Reviews of the Elderly Occur: Toward the Elucidation of the Mechanisms of Response and the Construction of a Theory of Techniques

研究代表者

林 智一（Hayashi, Tomokazu）

香川大学・医学部・教授

研究者番号：70274743

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：介護老人保健施設利用高齢者10名に対して週1回50分のライフレビュー面接を5回行った。その結果、語り手と聴き手の間でのわかり合いたいという思いを基盤として、語り手が人生を振り返り、人生の物語が紡ぎ出されるプロセスが明らかとなった。また、そこには聴き手の存在が大きく影響しており、ライフレビューは語り手と聴き手のふたりの間で生成され、共有される物語であることが示された。面接技法としては、聴き手が自身のこころの動きや揺れや動きを敏感に察知し、その揺れを語り手のこころの動きに呼応して生じる“とも揺れ”として吟味することで語り手と聴き手の関係や語り手のこころに対する理解が深化することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢者のライフレビューは自我の統合性に資するものであり、抑うつ感を減じ、生活満足度を高め、家族や古い友人など他者との絆を結び直し、自己を受容し、人と心を通わせあったり、カタルシスが得られたり、人間関係を促進したり、心の平穏が得られたりするなど、高齢者のメンタルヘルスにおいて重要なセラピューティックな効果がもたらされる。ライフレビューの奏功機序と面接技法論について明らかにした本研究の成果は、高齢者に対してライフレビューを行おうとする心理臨床家をはじめ高齢者ケア専門職にとって有益な知見であり、効果的なライフレビューが提供されることは、高齢者の福祉に資するものである。

研究成果の概要（英文）：Five 50-minute life review interviews were conducted once a week with 10 elderly patients using a long-term care health facility. The results revealed a process in which the narrator reflects on his/her life and a life story is spun out based on the desire for mutual understanding between the narrator and listener. The presence of the listener had a significant influence on this process, indicating that the life review is a story generated and shared between the narrator and the listener. The interviewing technique is to examine the listener's sensitivity to the narrator's mental movements, and to examine these movements as "mutual fluctuations" that arise in response to the narrator's mental movements, thereby deepening the relationship between the narrator and the listener and their understanding of the narrator's mind. This is a good way to deepen the relationship between the narrator and listener, and to understand the narrator's mind.

研究分野：心理臨床学

キーワード：高齢者 ライフレビュー 介護老人保健施設 奏功機序 面接技法論

1. 研究開始当初の背景

(1) ライフレビューの意義

Butler(1963)は、ターミナル期の患者や高齢者に過去を回顧するという現象が見られることに注目し、人生の終末期に近づき死を意識することで、パーソナリティの再統合を求めて過去の回顧が活性化するのだと考えた。そして、このような現象をライフレビュー(life review)と名付けた。それは、「記憶の自発的な再来、あるいは記憶の目的ある検索のどちらか一方ではなく、両者がともに生じるものである」(Butler, 1963)と説明されている。具体的方法としては、クライアントの生育史の聴取が中心となる。

ライフレビューが適応的に進展した場合には、より妥当な状況把握がもたらされ、人生に新たな有意義な意味が付与されるという。それは不安を軽減し、人に死の準備をさせる。すなわち、ライフレビューは究極的には Erikson(1963)の個体発達分化の図式における「自我の統合性 対 絶望」という危機の解決にむかうものとなる。

さらに、回顧する人の抑うつ感を減じ、生活満足度を高め、家族や古い友人など他者との絆を結び直し、自己を受容し、人と心を通わせあったり、カタルシスが得られたり、人間関係を促進したり、心の平穏が得られたりするなど、ライフレビューによって重要なセラピューティックな効果ももたらされるという(Haight & Haight, 2007)。

(2) 研究動向とその問題点

しかし、セラピーとしての回想の有用性はあいまいであるとも言われている。それは、回想に関する心理的プロセスが明らかにされていないからである(Watt & Cappeliez, 1995)。

回想研究においては、特定の問題に対する回想プロセスの構成要素を明らかにする必要があるという指摘もある一方(Watt & Cappeliez, 1995)、多様な対象者や問題にライフレビューや回想が適用され、相応の効果をあげているという現実もある。したがって、幅広い問題に共通する、中核的な機能や効果も存在するものと考えられる。いずれにせよ、ライフレビューのプロセスを詳細に検討していくようなアプローチが求められるところである。

また、現状の効果研究に欠落しているのは、回想法の中核的機能や奏功機序の解明ではないかと考えられる。そこをブラックボックスにしたまま、探索的に多種多様な尺度を介入前後で比較して、有意差に汲々とするだけでは、心理療法として有効性を論じることには限界がある。

2. 研究の目的

このような背景から、本研究では、事例研究的にライフレビューのプロセスを詳細に記述し、ライフレビューの促進要因の検討、事例の集積による典型的プロセスのモデル化、奏功機序の分析を行うことが必要であると考えた。さらに、ライフレビューを活性化し、促進させる聴き手の側の問題として、面接技法や基本姿勢についても検討することを目的とした。

3. 研究の方法

介護老人保健施設の協力のもと、施設を利用する 10 名の高齢者に対して週 1 回 50 分、計 5 回の非構造的ライフレビューを実施し、その面接過程を分析した。

4. 研究成果

(1) ライフレビューの展開プロセスと面接技法について

本研究では、聴き手から語り手に対して〈思い出の話を聴かせてください〉と伝え、語

り手から自発的な回想が生じた際に、その話題に積極的に傾聴することで回想を促進するという方法をとった。そこでは、両者の間に信頼関係を構築し、面接が防衛なしに、自身の内面をさらけ出しても安全な場であることが語り手に理解されることが第一歩となる。

そして、そこに生じた語り手の自発的回顧に聴き手が積極的に関心を示し、傾聴することで、語り手の回顧が活性化していく。そのような思い出を語り手があらためて見直すことで、追加的な記憶が呼び出されたり、記憶が修正されたりする。さらにそれらをもとに、思い出が推敲され、これまでとは違う角度から見直されることで、人生に対する見方や受け取り方が変化するという、視点の移動と認知の再構成が可能となる。そこでは、聴き手が語り手の話題のどこに焦点を当てて応答するのか、という聴き手の姿勢も重要となる。それが語り手の回顧を促進し、話題の方向付けとなり、評価を促すからである。

たとえば、そのような視点の移動が可能となるためには、聴き手が語り手の発言を鏡のように反射していることが必要となる。また、聴き手にとってわかりにくい部分や、あいまいな部分、そのときの語り手の心情などについては、質問が必要となる。そのため、面接技法としては、あいづち、うなずきなどのはげまし技法、質問、いいかえ、要約、感情の反映などが用いられる。

このような回顧の活性化、視点の移動、認知の再構成というプロセスは、円環的・循環的に繰り返されて、ライフレビューが進展していく。そこで、自身の人生に対してより妥当で適応的な見方が与えられれば、唯一、1回限りの自己の人生を受け入れられるようになる。

以上より、語り手の内発的なライフレビューへの動きと呼応するような面接構造や聴き手の応答が、語り手の自分の人生を振り返るプロセスを促進、援助する機能を有しているものと思われる。

(2) 語り手と聴き手の関係が人生の物語の内容を規定する

まず、語り手と聴き手が相対し、面接するという構造には、互いに「わかりあいたい」という思いが共有されていることが想定される。これは、人と人が関わり合おうとするときの前提であろう。そして、ライフレビューという設定の中で、語り手は、自分の人生について想起して語る。それは、基本的には語り手の中に、聴き手に対して「わかってもらいたい」という思いがあつてのことだろう。わかってもらえそうにないことや、言いたくないことは、語ることを躊躇されよう。

聴き手は、そのような語り手の発言を「わかりたい」と思っている。それが聴き手の基本姿勢であり、心理療法においてはクライアントに対する「あたたかい関心」とか「健全な好奇心」と呼ばれるものである。聴き手の応答は、語り手の発言の中の重要であると感じられたり、興味を引かれたりする部分に対して行われ、語り手も、聴き手から応答のあつた部分について語り続けることになる。

こうして、お互いの気持ちが相手に伝わり、共有されるようになっていく。そのような語り手と聴き手との「共鳴するところ」が、人生の物語として結晶化していくのである (Figure 1)。

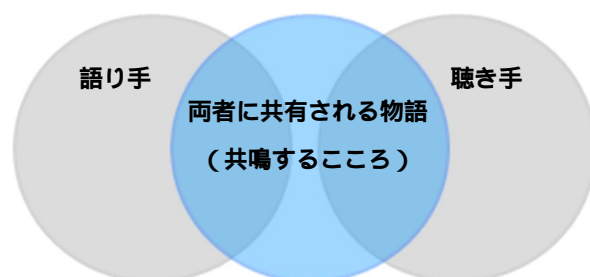


Figure1 語り手と聴き手の関わり合いのプロセスとしての
ライフレビュー

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 林 智一	4. 巻 6
2. 論文標題 認知症高齢者に対する力動的個人心理療法の試みー母親への心理的葛藤を有するアルツハイマー型認知症の高齢期女性との面接過程からー 林 智一	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 35 - 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 54
2. 論文標題 認知症高齢者に対するライフレビュー面接の再考ー記憶の受け皿、象徴的理解、メタ認知の変化ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国四国心理学会論文集	6. 最初と最後の頁 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 38
2. 論文標題 高齢者がライフレビューで内的家族イメージを語ることの意味 - Erikson, E. H. のライフサイクル論の観点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家族心理学会 第38 回大会 プログラム・発表論文集	6. 最初と最後の頁 23 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 34
2. 論文標題 高齢者のライフレビューにおける戦争体験の多様な相貌 高齢者が戦争体験を語ることの心理学的意味と語り手-聴き 手がともに守られる面接関係を目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本健康心理学会第34回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 4
2. 論文標題 高齢者のライフレビューにおける心的防衛をどう取り扱うか 研究のための面接で語らないことの自由と権利、そして語らないことで語られること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 2
2. 論文標題 「往くところが違う」ことの両面価値性とアンビバレンスに関する臨床心理学的考察 ライフレビューにおいて亡き妻との信仰の違いがテーマとなった一男性高齢者の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 149
2. 論文標題 高齢者のライフレビュー面接5回法における直面化に関する一考察 妻の介護における「心のこり」を語った男性高齢者の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告第 部第149号	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 智一	4. 巻 151
2. 論文標題 ライフレビュー面接5回法に見られた高齢者の死生観	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告第 部第151号	6. 最初と最後の頁 131-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 認知症高齢者に対するライフレビュー面接の再考－記憶の受け皿、象徴的理解、メタ認知の変化－
3. 学会等名 中国四国心理学会第77回大会（岡山大学：オンラインによる開催：2021年12月4日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者がライフレビューで内的家族イメージを語ることの意味 - Erikson, E. H. のライフサイクル論の観点から
3. 学会等名 日本家族心理学会第38回大会（立命館大学：オンラインによる開催；2021年11月19日-21日） 2021年11月19日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者のライフレビューにおける戦争体験の多様な相貌 高齢者が戦争体験を語ることの心理学的意味と語り手-聴き 手がともに守られる 面接関係を目指して
3. 学会等名 日本健康心理学会第34回大会（お茶の水女子大学：オンラインによる開催；2021年11月15日-21日） 2021年11月15日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者のライフレビューに見られた子孫との心理的紐帯に関する一考察 なぜ肯定的に語られるのか
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会（オンラインによる開催；2020年9月19日～21日；主催校 香川大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 研究としてのライフレビューにおいて潜在するこころの傷をいかに扱うか 救急的にケアして「語らないことで語られること」を聴き取る
3. 学会等名 日本健康心理学会 第 33 回大会（オンラインによる開催；2020年11月16日～22日） 2020年11月16日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 ライフレビューにおける高齢者の否定的な語りをどう聴くか - 研究としての面接において語ること・語らないこと、そしてそれを聴くこと・聴かないこと -
3. 学会等名 日本心理臨床学会 第39回大会（オンラインによる開催；2020年11月20日-26日） 2020年11月20日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 ライフレビューで語られた男性高齢者の戦争体験をめぐる臨床的考察 聴き手として体験することを事例研究化する試み
3. 学会等名 日本老年臨床心理学会第3回大会（オンラインによる開催；2021年3月20日-21日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者のライフレビュー面接で語られた信仰に関する臨床的一考察 宗教の歓喜と悲劇と両価性
3. 学会等名 日本老年臨床心理学会第2回大会（大阪大学会館；2019年11月30日・1月1日） 2019年12月1日
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 智 一
2. 発表標題 「死んでから往くところが違うこと」の臨床心理学的ー考察 妻との死別について語る男性高齢者のライフレビューにみる信仰の意味
3. 学会等名 中国四国心理学会第75回大会（香川大学教育学部；2019年10月19・20日） 2019年10月19日
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 智 一
2. 発表標題 男性高齢者のライフレビュー面接における過去の明かし方に関するー考察
3. 学会等名 日本健康心理学会第32回大会（帝京科学大学千住キャンパス；2019年9月28・29日） 2019年9月29日
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 智 一
2. 発表標題 ライフレビューの中で語られた家族イメージと転移的感情 高齢期女性に対する研究としての面接事例から
3. 学会等名 日本家族心理学会第36回大会（岩手大学上田キャンパス；2019年9月21～23日） 2019年9月21日
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 智 一
2. 発表標題 高齢者に対するライフレビュー面接5回法における防衛をどう考えるか 研究のための面接で語らない自由と権利
3. 学会等名 日本理論心理学会第64回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者のライフレビューにおける疑似統合についての臨床的考察 研究としての面接における高齢期男性の一例
3. 学会等名 九州心理学会第79回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者が思い出を語らない、語れないことの意味 - 非構造的ライフレビュー面接5回法の事例より -
3. 学会等名 中国四国心理学会第73回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者のライフレビューに対する聴き手の逆転移的感情：高齢期女性の2事例から
3. 学会等名 日本老年臨床心理学会第1回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 智一
2. 発表標題 高齢者にライフレビューを生起・促進させる質問技法についての一考察 ライフレビュー面接5回法の逐語録の分析から
3. 学会等名 中国四国心理学会第72回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 林 智 一（分担執筆）（竹森元彦編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 217
3. 書名 医療系のための臨床心理学（林担当分は第9章 pp.137-154）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------